



第11回 IARU REGION 3 ARDF 選手権大会レポート

モンゴル国ウランバートル (2017年8月20～25日開催)

8月20日～25日、モンゴル国ウランバートルにおいて第11回 IARU 第3地域 ARDF 選手権大会が開催され、169名の選手（オープン参加を含む）が8つの国と地域から集まって2つの競技で競いました。JARL が派遣した日本選手団は、選手30名、国際審判2名、団長と引率教員を含むチームサポーター5名で、個人で4個の金を含む9個、チーム対抗で1個の金を含む16個のメダルを獲得する大活躍でした。

【日韓の連盟が運営サポート】

今大会は開催意思を表明する連盟がなくて開催が危ぶまれましたが、昨年末になって第7回大会(2007年)が行われたモンゴルが開催することになりました。しかしながら、準備期間が短いことと、前回開催から10年経過しているので設備などに不安があるとのことで各国連盟に協力が求められました。そこで、送信設備をJARL、探査証明記録設備(SIシステム)をKARL(韓国)が支援することとなりました。

JARL は予備を含め14台のTXとアンテナを貸し出すことになり、事前準備として日本選手団サポートスタッフが5月に開催された新潟県ARDF競技大会でTX設置を担当して実際の設置を確認しました。JARL事務局にARDF委員が集まって送信機をモンゴル向けの設定に変更して、全てが正常に送信できることを確認しまし

た。設備の持込みについては作成した書類に不備はなく通関は容易で、全てが問題なく日本に戻っています。

集合日の20日に宿舎に到着すると、まずTXの操作方法のレクチャーをおこないました。日本からJG2GFX種村一郎団長(JARL副会長)以下のサポートスタッフが分担して持ち込んだTX14台の操作は、地元モンゴルで競技のすべてを把握しているMunkhdelgerekhさん(以下、ムンクさん)に、専門用語を理解していない通訳を介して説明することになったのですが、すぐに要領を理解してもらえたので安心できました。言葉は通じなくても同じARDF仲間なので、機器の操作方法はすぐに伝わるものです。同じ部屋では韓国チームもSIシステムの扱い方法などをレクチャーしていました。

審判長は群馬県で開催された第10回大会(2015年)でも審判長を務めたJF1RPZ出田洋さん(Reg.3 ARDF委員会議長)、審判員にJFφFDT佐藤久さん、韓国、カザフスタンから各1名、モンゴルからムンクさんと国際審判員も各国が協力しました。

【踊る開会式】

宿舎は2007年と同じナイラマル国際子供センター(Nairamdal International Children's Centre)。日本の少年自然の家に似た施設です。21日午前に宿舎前の広場で開会式がおこなわれました。





主催者挨拶や来賓紹介の後、宿舍の指導員によるオリジナルダンスの披露があり、参加者がそれを真似て楽しく踊りました。

午後は宿舍周辺で受信トレーニング。TX は主として女性の現地スタッフが指定された位置に設置。それをムンクさんが確認して問題点があればすぐに修正していました。本番でもムンクさんがすべての TX を確認する体制をとるとのことで安心することができました。

【雨の中の第1競技】

第1競技は22日に144MHz帯クラシック部門でおこなわれました。バスに分乗して1時間30分ほど移動した休憩所などが設置された草原広場が待機場所でした。

今大会は天候には恵まれず、大会前から雨模様の日が多かったです。特にこの日は、スタート前から冷たい雨が降ったりやんだり、選手も役員も大変でした。悪天候の中、現地スタッフがTXの設置場所への到達に手間取り、スタート時刻が2時間も遅れてしまいました。待機場所でスナック菓子が配布されたのが助かりました。

競技地域は比較的通行しやすい針葉樹の林が多かったようです。

各選手は自分の進みたい方向に一直線に進むことができたかと思えます。

競技地域内には牛などが放牧されていて、各所に糞があって、乾いていればまだしも雨だったため軟らかい状態で走行に苦勞する選手もいました。

待機場所からフィニッシュ地点に至る道路は悪路で、乾いていれば問題なかったのであろう乗用車は通行困難で、四輪駆動車が通るのがやっとでした。



選手の荷物は四輪駆動車で運搬されたのですが往復に時間がかかって、便乗するサポートスタッフや荷物の到着が遅くなってしまいました。

競技を終えたらフィニッシュ近くの施設で弁当が配布されましたが、雨に濡れた体にはふるまわれた温かいカップラーメンがとても美味しかったです。

帰途はスタート待機場所近くに停まっているバスまで四輪駆動車で分乗するか徒歩で移動。

ところが、バスがぬかるみでスタックしてしまい、みんなでバスを押すことになってしまいました。さらに、舗装道路に出たところでスタックしているバスがあるとの連絡が入ったので運転手はバスを停めて応援に。運転手は「モンゴルには良い所がたくさんあるのに、わざわざこんな所に来なくても…」とぼやいていました。

これらによって宿舍帰着が遅くなったので、夜に予定していた表彰式は翌日に延期されました。

【休息日は観光】

休息日の23日はチンギス・ハーン像テーマパークを観光しました。

ウランバートル市の中心部から約50km離れた場所なのですが、往復の途上で前日の競技地域の前を通過。「こんなに離れたところまで来ていたのか」と改めて感じました。

午後は市内に戻って昼食とデパートで買い物。お目当てのカシミヤ製品などの土産品を購入しました。

【第2競技は宿舍周辺で】

24日の第2競技は3.5MHz帯クラシック競技です。





当初の発表ではバスで移動するとのことでしたが、徒歩で宿舎前の道路を通って山中に向かい、建物がなくなったところがスタート地点でした。

フィニッシュは宿舎のレストラン横で、競技地図は2007年のものと同じ範囲でした。

スタート前に降雨がありましたが、幸い競技中は土砂降りになることもなく、選手は気持ちよく競技ができました。スタートも順調におこなわれました。

モンゴルは大草原のイメージが強いですが、競技地域は高低差のある山間地域の林でした。林は360°全方向どこにでも入っていけるというARDFにはもってこいで、背の高い立木によって遠くまで見渡すことができないという状況でした。

しかも建物や人工物もほとんどないところですので、コンパスと競技地図を頼りに現在位置を特定しなければならぬという難しさがありました。

またアップダウンの繰り返しが多く、選手の体力をジワジワと吸い取っていく過酷なものでした。

その反面、どこにでも入って行けるという競技地域は、日本と違った爽快感を感じることができました。第1競技と比べると、競技地域内のフィニッシュ地域の手前に大きな山がそびえており、山の向こう側の信号が弱くなり、かなり苦勞した選手もいたのではないかと思います。



【活躍した日本選手】

冒頭に記載のとおり日本選手団は多くのメダルを獲得する大活躍でした。

特に144MHz帯が目覚ましく、W50、M15、M50クラスで個人優勝、国内の選手層が広いM60クラスでは2位と3位になってチーム優勝を獲得しました。

国際競技会に初出場で初優勝したM50クラスのJG1DGC 松島謙一さんは、「天気が良くなかったので、モチベーションを維持するのに苦勞した。『お前はできる！！高いところへ上りたい！！』と自身を鼓舞したそうです。

3.5MHz帯では優勝はW50クラスのみと少し残念な結果でしたが、W19クラスチーム対抗では2競技共に2位と安定した探査ができていました。

また、今大会には各チーム各クラス3名までの公式選手の他にオープン参加者が多くあり公式選手と同一条件で競いました。

日本からはジュニア育成としてM15とM19クラスに各1名がオープン参加しました。

オープン参加であっても探査力は劣ることなく、オープン参加者を含めた順位では公式選手よりも上位となることがあって、ジュニアの選手層も厚くなっていることがわかりました。 (レポート:JP3EVM 植木 等さん)

